

緒 言

松山幸弘

浜松医科大学整形外科

脊椎脊髄外科医にとって、最もつらいことは術後の麻痺であります。

また、この術後麻痺は患者さんにとっても大きなダメージを与え、場合によっては人生を左右することもあります。したがって、術後麻痺はできる限り発症しないよう、私たちは最大限の努力をする必要があります。

日本脊椎脊髄病学会モニタリングワーキンググループが行った調査では、脊椎脊髄指導医が在籍する脊椎専門病院でさえ、術後麻痺が約2%に生じており、特に脊髄髄内腫瘍、脊柱変形、胸椎後縦靱帯骨化症(OPLL)症例に多いことがわかりました。

そこで本特集では、「脊椎脊髄手術の医療安全」をテーマとしました。

脊椎脊髄モニタリングワーキンググループからの術中脊髄モニタリングの最新情報を報告していただき、さらには脊髄髄内腫瘍、脊椎腫瘍、胸椎OPLL、そして小児・思春期・成人の脊柱変形に対して精力的に手術加療を行っているプロフェッショナルスペシャリストの先生方の麻痺や合併症回避の工夫を誌上シンポジウムとして取り上げました。

各先生方には

- 1：術中脊髄モニタリング
- 2：(変形では)ナビゲーションの応用
- 3：周術期管理

を中心に論述していただいております。

本誌上シンポジウムをきっかけとして、いかに難治性の脊椎脊髄疾患を安全に治療するかにおいて指針の一助となれば幸いです。